

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	東京大学	拠点番号	D05
申請分野	人文科学		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	基礎学力育成システムの再構築 Center for Research of Core Academic Competences		
研究分野及びキーワード	<研究分野:教育学>(学力論)(学力問題)(学習指導論)(カリキュラム構 築 開発)(教育政策)		
専攻等名	大学院教育学研究科総合教育科学専攻 大学院情報学環学際情報学専攻 社会科学研究所比較現代社会部門		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 金子 元久 教授 他 20名		

拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成16年1月現在)を抜粋

<本拠点がカバーする学問分野について>

日本の子供がもつべき基礎学力とは何か、それを形成するために学校は何をなすべきか、そしてそれを社会はどのように支えるべきか。こうした問題を実証的、理論的、体系的に解明し、それをもとに基礎学力を形成する新しいシステムの構築に向かって社会に提言し働きかけることが、本拠点の目的である。

<本拠点の特色及びその目的等>

上述のような課題に本拠点は、先端的な研究方法を持って取り組むことは言うまでもないが、現在の学力をめぐる問題に有効な展望をもたらすためには、都道府県、市町村の教育委員会、学校そして教師の実践活動に積極的にかかわるとともに、その活動を互いに交流させていく仕組みをつくることが重要である。また国際的にも基礎学力がきわめて重要な問題となっている。国内外のネットワークを構築しつつ、先端的な研究を進めるところにこの拠点の特色がある。

<COEを目指すユニーク性>

学力問題について、こうした総合的なアプローチを行う試みは数少ない。国立教育政策研究所において全国的な学力調査が行われているが、基本的には全国的な現状を明らかにすることに主眼がある。これに対して本拠点は単に従来の観点からの学力水準を測定するにとどまらず、学力を多角的に捉えるとともに、学校や自治体の実践に参加し、改革のネットワークの構築を通じて、新しい学習システムの構築の方向を求めるところに独自性がある。

<本拠点のCOEとしての重要性・発展性>

本拠点は国内外の研究者、行政担当者、学校管理者、教員などとの有機的なネットワークを形成するとともに、それを基礎に先端的な分析の方法を作りあげていくことを特徴としている。こうしたアプローチをとることによって、新しい社会にむかって、教師や行政、研究者、さらにマスメディアや企業を含めた、広範な参加を得る新しい公教育システムを作る手がかりをつかみつつある。それをまた専門学術領域としての教育学の研究、教育に生かすことを狙う。

<本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果>

すでに8種のワーキング・ペーパーが発行されており、今後、発行するものを含めて、基礎学力の研究をめぐるまず参照すべき文献群が蓄積される。またこうした個別の分析から、実践的・政策的な含意を検討する報告書を、発行することになっており、これによって社会的な提言を行う。これらは教育学の学部、大学院での教育に重要な教材となる。

<背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等>

問題がきわめて広い幅と奥行きをもっているために、従来の専門分化した教育学の組織を基盤としては十分なアプローチが難しく、独自の研究組織による総合的・体系的な研究が必要である。国際的にみれば、OECDが2000年に「国際学習到達度調査」(PISA)調査をおこなったが、その詳細な分析、あるいは改革の方向についての研究は各国に期待されている。本COEプロジェクトは、体系的な研究を推進することによって、この問題における国際的な研究連携の核となることが期待されている。

機 関 名	東京大学	拠点番号	D 0 5
拠点のプログラム名称	基礎学力育成システムの再構築		

21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、下記のコメントに留意し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

本計画は基礎学力育成の新しいシステムを構築するために基礎学力に関する問題について実証的、理論的、体系的な解明を目指すものであるが、調査を中心とする実証的研究に傾斜しすぎており、プログラムから期待される基本的課題についての総合的観点からの取組に一層の努力が求められる。調査に関わる研究計画で修正を余儀なくされたものに対しては早急に具体策を講じ、併せて各ユニットの統合化を明確な原理と方法で確立することによって、個人研究の次元を越える研究体制の整備に努める必要がある。個別の研究領域は相応の成果を出しているが、調査データの収集と分析という予備作業に基づき、基礎学力とは何かの解明およびその評価方法の案出も含めて、プログラムを体系的に方向づける具体的内容を示していくことが求められる。学力向上至上論が加速化している現実に対しても本プログラムの位置づけには配慮すると共に、今後国際的認知度を高めるための発信に努め、若手研究者が国際的に活躍できるような指導訓練プログラムを一層推進し、世界最高水準の成果が出ることを期待したい。